

2007年サンマ

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	数 量											
	漁獲	産地	輸入	輸出	東京			消費支出 生(円)	在 庫	加 工		
					生	冷	開			塩干	塩蔵	缶詰
18	244	208.4	0.48	26.2	14.7	0.7	0.3	2,272	46.5	24.5	13.1	
19	298	257.9	0.31	32.9	15.4	0.6	0.3	2,380	39.3			
%	122	124	65	126	105	83	93	105	85	0		

年	価 格						全サンマ				
	産地	東京			輸入	輸出	水揚	価 格	消費支出 生(円)		
		生	冷	開							
18	69	332	217	363	195	76	240.0	70	1,479		
19	73	319	222	365	244	90	295.8	74	1,504		
%	106	96	102	101	125	118	123	105	102		

漁獲の動向と資源

日本のサンマ漁獲量は1990～1997年に23万～30万トン程度であり、高水準で安定していた。しかしながら、1998、1999年漁期には約14万トンで1997年漁期の半分程度の漁獲に留まった。2001、2003年漁期に26万トン台の漁獲を記録したが、2000、2002、2004年漁期は20万トン程度の漁獲に留まっており、2005年は23万トン、2006年は24万トンの漁獲があった。近年、ロシア・韓国・台湾・中国など外国の漁獲量が急増しており、2005年の日本のシェアは5割弱まで低下したが、2006年には61%に回復した。

2007年漁期前調査の中層トロール調査結果によれば、西経165度～日本の沿岸に分布しているサンマの資源量は、約4,400千トンで、豊漁であった2006年と同程度である。また、近年のサンマの0歳魚加入量は安定しており、歴史的にみてCPUEも高水準にあった。これらのことから、サンマ太平洋北西部系群は、未利用資源を多く残した余裕のある状態であると判断された。1980～2006年のCPUEで検討すると、2006年は、27年間の平均値に標準偏差を加えた値より大きく、資源水準としては、高水準と判断された。また、近年（2004～2007年）の資源量水準が安定しているため、資源動向は横ばいと考えられている。

19年の漁獲量は前年を1万トン上回る約29.8万トンであった。

本年は業界の合意の中、片口選別機をはずしてから2年目を迎えた。また各種休漁措置は前年同様実施され、積荷制限も含め漁期終了まで漁獲の平準化のための措置が講じられた。

本年は前年より1日早く7月8日から流し刺網、同16日には5トン未満船の棒受網、23日及び26日（ロシア水域に入域しない漁船が23日）には10トン未満の棒受網の操業が開始された。そして棒受網の20トン未満小型船が8月5日、同40トン未満中型船が8月8日、同40トン以上大型船が8月19日の解禁となった。

本年のスタート時（7月）の漁は一部ロシア水域に入ったものの昨年をやや下回る漁であった。その後8月に入ってからは一転好漁になり早々と積荷制限や休漁措置が講じられたが、水揚げは昨年を大きく上回った。また盛漁期の9月に入ってから水揚げ規制もあり前年を下回ったものの水準としては高かった。その後も好漁基調は続き、10、11月とも好漁を維持した。また漁獲枠の増加があったこともあり漁獲も伸びた。そして最終的には11月一杯で漁は打ち切られた。

本年の初期漁場は流し網が昨年より沿岸よりの道東近海で始まり、昨年同様10トン未満船が

釧路南東沖合で始まり、8月に入ってから一部ロシア水域での漁場形成がみられたものの道東沿岸に漁場が形成された。

9月に入ってから主に道東近海であったが、中旬後半には襟裳岬東に先端漁場が形成され、徐々にこの漁場が主体となった。10月に入っても親潮の差し込みが強くなり、岩手近海でも行状形成がみられ、道東～襟裳岬近海とそれぞれ、大型船、小型船が分かれての操業となった。11月には南下先端群は小名浜近海であったが、まだ道東、襟裳岬、三陸近海漁場も形成されており、中旬まで北海道沖では操業がみられた。中旬に入ると先端群は犬吠埼沿岸に現れ、この海域でも操業が続いた。因みにオホーツクの漁獲は71隻268トン（前年3隻15トン）であった。

魚体長は、8月下旬に中小型が主体だった他は、漁期全般を通じて大型(29cm)主体の組成で150gにピークがあり、通算では大型62%（58%）、中型28%（27%）、小型10%（15%）であった。

魚価は、初漁期の7月が昨年を上回ったものの、8月には漁獲が急増もあり昨を下回った。9月以降は順調な漁獲がみられ、価格は2桁台に急落した。しかし、本年はミール市況や餌料の高値等もあって、2桁台になってからはじり安展開となったが、極端な下げにらず結果として73円で前年（69円）をやや上回って推移した。

在庫量

本年は5.4万トンと近年では最も少ない越年在庫から始まった。こうした低い在庫水準は新漁前の6、7月においても続き前年を約7千トンも下回った。そしてこの傾向は例年在庫が最も少なくなる7、8月においても極めて少ない在庫で2.1万トンにまで減少した。しかしその後は、漁が順調だったことや、TACの増枠などもあり10月以降急増し、その結果越年在庫も6.3万トンと前年（5.4万トン）を大幅に上回った。

平均在庫量は、上半期までの少なさを反映し、3.9万トンで前年（4.6万トン）を下回り、近年でも最も少ない年となった。

消費地入荷量と価格

19年の東京中央卸売市場の入荷量は、1.7万トン（生1.4万トン、冷0.3万ト）で前年（1.7万トン：生1.3万トン、冷0.4万トン）並みであった。

本年は、昨年以上に好漁と大型の割合が多かったこともあり、鮮魚の入荷が多かったのが特徴。

本年の東京消費地における入荷サイズは前年同様45尾、50尾サイズ主体の入荷であった。

また、本年の塩干物の入荷は0.3万トンで引続き前年(0.3万トン)並みであったが、若干減少気味である。

本年も東京消費地価格のピークは7月にみられたが、前年ほどの高さではなく、その後は12月を除いて各月とも前年を下回って推移した。

平均価格は生319円(前年332円)、冷222円(前年217円)、塩365円(前年363円)で、生鮮は下落したが、冷凍、塩干加工品も依然変化は少なかったものの若干上げた。

また消費支出(1世帯当たり)をみると、数量、金額とも前年を上回った。

輸 出 入

本年の輸入は、619トンで前年(480トン)を下回った。

これは本年も前安定した在庫と資源の豊富さと現実に国内生産が順調であったことが要因である。

輸出はH4年をピークに近年減少傾向が続いていたが、本年は3.3万トンと前年(2.6万トン)に続いて増加し、平成年代初頭の頃に戻った。

価格は、輸入244円(前年195円)、輸出90円(前年76円)であった。

輸出国は、本年も韓国が最も多く30%を占め9,717トンで、続いて中国、タイ、ロシア、フィリピン、米国であった。